

# 私の保育

—子どもたちとともに歩むこと—



松田英子

私は昨年四月から勤めたばかりの新米教師です。なぜ私がこのようにおきなごたちとかかわるようになったのか少し触れてみたいと思います。私は小さい頃からずっと教師という職業にはあこがれの気持ちを抱いていました（たいていの子どもたちが一時期あこがれるように……）が、高校の時から、はつきりと小学校教師になりたいと思うようになりました。そこで、幼稚園教師になりたかったのではありませんが、いずれは小学校の教師になりたいと考えて、幼児期の子どもの実態を踏まえたうえでやろうと地元の四年制大学教育学部に新設されたばかりの幼稚園教員養成課程に入学することを望みました。

しかし、入ってみて、専門科目の講師の少ないことや、カリキュラムが重なりすぎて関心ある講義を受けられなかったり、適当な場所が用意されていなかったりで、私たちを受け入れると公表しておきながらこんな不十分な体制であった大学側への不満でいっぱいになったものでした。この新課程では幼稚園教諭一級・小学校二級の普通免許が取得できるものでした。当時、就職難を予想されていたので、免許はとれるものなら頑張って小学校一級・養護教諭一級もと欲ばっていました。でも私にとって欲ばったことが、自分自身のそれま

での「教育」に対する考え方を根から掘り起こされるような体験をもつことができたのです。こうして今、障害をもって  
いる子らとの日々があるのです。

「子どもを理解すること——本当に難しいことです。表面上は、子どもについて書かれてある本をいっぱい読んだりすれば十分にわかりそうですが、何しろ相手は動く人間です。また、こちらにも感情をもったおとなの人間ですから益々大変なことです。ましてや子どもにほとんど言葉がなく、表情も固いとしたりどうでしょうか。私たちはお互いを理解しようとする時、どうするでしょう。表情から喜びや悲しみを読みとったり、動いているところから相手の興味・関心事をさぐったりしますが、ほとんどはコトバによるコミュニケーションに頼っています。

私が日々の保育にあたっていて、コトバを話さない子たちを理解しようと全身で語りかけをすることを常に心がけています。コトバでなく体での対話です。余談ですが、前に大変おもしろい映画を観ました。「ブロー・ミー」という題名でしたが、ある夫婦がいて、夫は妻が浮気をしたらしいと思  
い込み、探偵を雇います。妻はただ自由になりたくて外に出  
ていたのですが、探偵はとにかく追跡しました……何も言

わず、彼女のやることを真似して同じことをやってみるので  
す。そうして探偵と妻は一言もコトバを交さずして友だち  
になりました。探偵は彼女の夫に、何も言わず彼女の後につ  
いて、彼女のすることを真似していれば彼女を理解でき  
るというのです。その夫婦はもちろん……。

コトバなんて厄介なものです。とんだ誤解をしてみたり、  
つけ足してもつけ足しても十分に気持ちを表現できないとき  
があります。しかし、やはりコトバがあるならお互いを理解  
するのに早いです。

私の勤める幼稚園は、障害幼児のための母子通園施設であ  
るグリーンローズ・オリブ園と「ことはの教室」が同じ敷地  
内にあります。また、乳幼児の保育園も隣設されています。  
幼稚園の各クラスには一〜三名の障害児が導入されています  
し、保育園にも週回かの割で四〜五名の障害児が入ってい  
ます。

また施設側では一五〜二〇名のグループ三クラス、難聴児  
五名一クラスの四グループが集団指導をうけています。朝の  
自由遊び時間に一時間程参加するグループも一つあります。  
これらのグループは、グループ同志の合同保育はもちろんで

すが、幼稚園のクラスと合同保育したり、色々な楽しい行事（遠足・運動会・お店やさんごっこ・雪あそびなどなど）に参加できます。このようにしていつでも障害児と普通児との交流の場をもつことができるというのが最大の特徴といえます。

幼稚園クラスにいる障害児は他児とのまじわりの中で、刺激され確実に伸びています。けんかや普通児のいたわりの中で……。

私は、幼稚園教員ですが、障害児担当として、幼稚園クラスの導入期以前の障害児一四人の集団指導にあたっています。ここには私も含めて三人の保育者がいます。他の二人の保育者には S T (speech therapist 言語治療士) の資格があり、それぞれの持ち味を生かし合っていますし、一名は男性であり、特に男児とのかかわりにとっても有効的です。

次にグループの一日の流れを少しみていただきたいと思います。

(下表参照)

10:00	登園 幼稚園児との自由あそび
	排泄, うがい
10:30	マラソン, 散歩
	(おはじまり) ●体操 ●あいさつ ●手あそび その日の課題的なもの 製作, 戸外遊び コーナー遊び etc
11:10	排泄, 食事準備
	食 事
11:50	出席スタンプ, うがい
12:00	絵本やペープサートのおはなし
12:10	(おかえり) ●あいさつ

子どもたちが来園する主訴は、「ほとんどことばが言えない」とか「呼んでも返事をしない」「ひとのいうことがわからない」というコトバに関するもので、そこで障害に気付いているようです。コトバだけ遅れているのではなく、発達検査をしてみると運動面にも落ちこみがみられますし、社会面にも対人関係の欠如があることが多くあります。ですから、コトバを持たない子には、コトバだけの訓練では治療にならないのです。全面発達をめざす治療教育——保育でなくてはならないのです。

脳性マヒのように明らかな機能障害の場合とは別として、どうも歩くのにも走るのにも何かバランスの悪さがあるようです。多動でかなり走り回っている子でも一本の線の上を上手

に歩けないことや、ヨードンで目的地まで駆けることは苦手であることが多いのです。そこで毎朝のロープにつかまっ  
てのマラソンを日課として考え出したわけです。

また、目と手足の協応動作も苦手のようです。音楽はみんな好きなので、カセットテープにレコードをふきこんで、よくTVでやるような体操を使って、音に合わせて身体をゆすったり、まわったり、はねたりの簡単な動作模倣をひき出します。はじめは全く関心がないかのように他の遊びをしている子どもも、次第にちらっと見るようになり、仲間に入りはじめます。それとお母さんとの手遊びなども通じて協応動作を促進します。

障害児、殊に対人関係の稀薄な子の場合、よく母親の子どもへの養育態度が良くなかったからなどと言われますが、障害をもつていて、コトバの出ない子どものため、子どもの要求や気持ち等をわからなく困惑してしまった母親が、その後あまり育児が上手でなくなるという例が多いようです。そのため子どもは母親の存在意識がないことがあります。また自身自身の存在意識もなく、返事をしないことにもつながります。

そこで、母子関係の安定化をはかり、子ども自身のボデ

ィ・イメージを確立させるため、お母さんと一緒の手あそびや遊戯をしています。愛情をもって肌に触れてあげたり、呼びかけしたり、くすぐりによる笑いを誘ったりすることによって次第に母親との関係が良好になります。遊びの上手なお母さんになったらしめたものです。

食事の時間。待ちきれずに歩き回り他児のお弁当に手を出す子、泣きわめく子とさまざまですが、初めの段階はまずみんな同じ場所で楽しい雰囲気でお食することに重点をおいて残してもかまわないことからはじめます。このような毎日のくり返しから待つことができるようになります。偏食などもあり改善されてきていますし、他児の刺激をうけてか、自分でスプーンや箸をもって食べるようになりました。

幼稚園児との合同保育は、はじめは食事の時間だけ、それから食事後の絵本・紙芝居——自由あそびとだんだん時間を長くしていきます。クラスの子どもたちと慣れてきて、十分な交流がみられるようになったところでやっと、一緒に課題的な遊びをするようにしています。

このようにして幼稚園児との交流をもつとき、ことばの教室、オリブ園の職員たちが集まって合同クラスや日時を決めています。どちらとも自分たちの専門性を生かしていること

しています。今年度は試験段階ですが、来年度からはさらに充実したものとなるよう、今年度の反省をもとに練りなおさなくてはなりません。

障害児を担当してみても、普通児の発達や人間の気持などがあらためてわかったような気がします。この子どもたちとの気取りのないつき合いによって真の対人関係が生まれ、ともに歩むことができるものだと思います。

かなり遠いところから通園している子どももいます。そのため親の精神的・経済的な負担は大きいものです。経費は福祉関係と相談して減額の方向へともっていったりできるので、長時間交通機関を利用して来る子どもたちは、園に着くと疲れてしまいます。こういうような状態なので、できるだけ地元幼稚園や保育園に通園させたいと考え、フォローしてゆけたら良いと思っています。しかし、母親がつきつきりで通わせるのも大変です。かといって保育側の方で障害児を担当保母がいるわけではありませんから、容易には障害児を受け入れてはもらえません。

保育者もまた、このような子どもたちと接したことがあまりないということで、なかなか受け入れ難いようです。障害

児について勉強する多くの機会が与えられています。そのような場にどんどん参加していくべきだと考えます。現在、現場で働いている保育者の再教育の場が是非とも多く必要とされます。秋田県においては、秋田大学教育学部に臨時養護教諭養成課程として一年間研究できるところがありますし研究会もあちこちで開かれているようです。

しかしながら、ことばの教室、オリブ園の卒園児を快く引き受けて下さっている幼稚園、保育園もあります。就園後の様子をたずねたり、週二回の割合で個人指導にあたり、フォローアップしています。

私は大学時代に、自閉的な傾向をもつ幼児と出会い、幼稚園に通園している間半年程観察していました。その子は今、小学校に入学して情緒障害児学級に通級しておりますが、その子どもを通して、「子どもを知る」ことの難しさを知らされました。

その子の多動なことといったらすごいものでした。後を追いかける私の方がくたくたになったものでした。その動きの多いことは、その子どもの興味、関心のあることを意味していたのであり、TVのCMを時々言うのには、それなりに関連があり、その子なりに物事を捉えていたのです。

そうではなくて、こうなんだよと何度教え、(教え込むとい  
った方が正しいかもしれないが)てやろうかと気はあせるば  
かりでした。しかし、私とその子は十分な人間関係もできて  
いなかったため、何一つ聞き入れてもらえませんでした。当  
然のことだったのです。やはり基本になるのは、お互いが生  
のままですきあい、理解しようと努めること——こうやって  
生まれてくる人間関係ではないかと考えます。

私は今、障害児の集団指導を担当していますが、前に例に  
あげた子どもとは違った障害の子どもも担当しています。対  
人関係や知的な能力はかなりよいのですが、身体が不自由で  
動くのが困難な子ども(例えばC・Pのような)を扱ってみ  
て、絶対させてはならない部位とか、必ず段階を踏まえてや  
らなければならぬという特別な原則があります。本当に障  
害に早く気付いて、早く処置をとらなければなりません。殊  
にC・Pの場合であれば、筋肉がどんどん固くなってしま  
うので、早期治療ということは言うまでもないことです。私  
たちのところには、このような子どもたちの指導に詳しいも  
のはあまり多くないので、他の機関の専門の先生に相談し  
たりしながら横の関連をとってやっております。私自身もこ  
のことはとても勉強になっていきます。

一つのグループに色々な障害をもつ子どもがいると、指導  
方針がたてにくいとかいう理由で、案外に同じ障害をもつ子  
ども同志を集めてしまいがちですが、それには少し納得がい  
きません。確かに指導をする時に内容を決めるのは大変です  
が、子どもは他児とのかかわりの中で変化していきます。一  
例をあげれば歩行できない子がまわりの走っている子どもを見  
て、『歩きたい』という意欲をおこし歩行訓練を喜ぶよう  
になったりしていることです。歩行できない子にいたわりの気  
持ちで手をひいてあげたりする子どももできてきます。子  
どもたちがともどもに育ち合うという感じです。私たち保育  
者はまさに子どもから学習しているのです。子どもたちの感  
じるところを感じとり、子どもたちの行動を理解できるよう  
な、その子どもたちひとりひとりのもっている限り可能な  
性をひき出してやれるようになりたいものです。

「思いつくままに綴ってしまいましたが、論点が定まら  
ず断片的に色々なことを書いてしまいました。拙ない文章を  
読んで下さった方に感謝いたします」(ルーテル愛児幼稚園)

